

つがるだこ ○「津軽凧」の概要

津軽凧は窮した藩士の内職として江戸時代から作られるようになった。通常凧は竹を使って作るが、津軽地方では寒さで竹がなかなか育たない環境だった。そのため凧の骨に、軽くて弾力性に富むヒバ材を薄く削って用いるようになった。

凧絵は、三国志や水滸伝などに登場する英雄・豪傑のほか、日本の歴史上の武将を題材とした勇壮な武者絵が多く描かれる。太く力強い墨の線と赤を基調とした鮮やかな色彩で描き出される武者は、弘前ねぷたさながらに見る者をひきつける。

【主な製造工程】骨組の木取り→組立→墨書き→裏打ち→彩色→仕上げ→骨張り付け
→縁紙張り付け→糸目付け→ブンブ作り→完成

【主な製品】凧

きんぎょ ○「金魚ねぷた」の概要

弘前ねぷたは、1722(享保7)年に初めて文献に登場して以来、様々な形のねぷたが時代を彩ってきた。

江戸時代、金魚は一部の上流階級の間でしか飼うことのできなかつた高級魚であった。庶民は憧れを抱き、それをねぷたにして子供たちに祭りの時、提灯のように持たせ練り歩いたとされる。「金魚」はその名の通り金運をもたらす幸福を呼ぶ縁起物として長きに亘り、廃れずに今現在も市民に親しまれている馴染み深い工芸品である。

近年では、祭りのみならずインテリア装飾やお土産としても人気を集めている。また、様々なバリエーションの金魚ねぷたが製作され、伝統工芸の新たな発展と話題作りにも努めている。

【主な製造工程】竹割→骨組→紙貼り→墨描き→ロウ描き→彩色→仕上げ→完成

【主な製品】灯籠

こぎん ○「こぎん刺し」の概要

江戸時代、津軽の農民は木綿の衣料を着ることが許されていなかった。そのため麻地の着物を何枚も重ね着して寒さをしのいでいた。そこで農村の女性たちは保温と補強のために、麻の布地の要所要所に木綿で刺子を施した。こうして生み出されたこぎん刺しは、厳しい北国の自然の中で生きてきた女性の知恵の産物である。

こぎん刺しの特徴は、藍染の麻地に白い木綿糸で縦の織り目に対して奇数の目を数えて手刺しすることで、素朴で美しい幾何学模様が生み出されるところにある。また今日では用途によって木綿地やウール地なども用いられており、色彩も時代を経て多彩さを増している。

【主な製造工程】糸より→麻地染め→生地織り→生地を整える→裁断→刺し
→仕上げ→加工→完成

【主な製品】巾着・帯・バッグ・ネクタイ

令和4年度青森県伝統工芸士認定者の概要

たかはし かつよし つがるだこ
高橋 勝良氏 《津軽凧》

弘前市

- ・高橋紋章染工場6代目として紋章や暖簾製作の傍ら、昭和53年吉谷津山に師事し、伝統的な材料や技法を用いた津軽凧の製造技術を学ぶ。従事年数は34年。
- ・完成させた絵に裏打ちをして凧骨に貼る「後裏打ち」技法の唯一の伝承者で、紋章製作で培った寸分違わぬ再現技術を背景に津軽凧の様式美を追究している。
- ・令和元年には現存する最古の津軽凧製作手本「つしま粉本」の模写を完成させ、明治時代の技術や色彩を忠実に復元したことにより、失われていた津軽凧技術の継承に大きく貢献した。



たかはし かつよし きんぎょ
高橋 勝良氏 《金魚ねぶた》

弘前市

- ・高橋紋章染工場6代目として紋章や暖簾製作の傍ら、昭和53年吉谷津山に師事し、竹や手漉和紙など伝統的な材料や技法を用いた金魚ねぶたの製造技術を学ぶ。従事年数は34年。
- ・骨組では竹裏を表にして丸輪を作り面に節を目立たせない工夫や、「うろこ」部分の濃淡を鮮明に描くため「片羽ボカシ」技法を用いるなど、道具作りから成形、彩色など細部にこだわった金魚ねぶた製作を伝承している。
- ・平成31年発行の「弘前ねぶた本」への寄稿や市民を対象とした製作体験教室講師等を通じ、後継者育成に大きく貢献している。



なりた げんせつ きんぎょ
成田 幻節氏 《金魚ねぶた》

弘前市

- ・ねぶた製作をきっかけに、昭和58年から伝統材料や技法を用いた金魚ねぶた製作の請け負いを開始する。従事年数は39年。
- ・針金を一切使用せずにヤスリをかけた竹でなめらかな骨組を成形し、墨描き工程では顔、えらなどを左右対称に墨入れするなど、型くずれしない丈夫で優美な金魚ねぶたの製作を心掛けている。
- ・国内外の物産展等での実演販売や、地域の学校や子ども会、自治体などが実施する製作体験教室の講師を務めるなど、金魚ねぶたの認知度向上や販路拡大、後継者育成にも大きく貢献している。



- ・平成22年、母、おばとともに「三つ豆」（令和3年度県伝統工芸品製造者に指定）を立ち上げ、こぎん刺し商品の製作・販売を開始する。従事年数は12年。
- ・草木染糸を使用した現代生活に馴染む色使いと古作こぎんの伝統的な図案を融合させることで、伝統技術・技法を継承しつつ、若い消費者にも手にとっていただける商品の製作を心掛けている。
- ・県内でのこぎん刺し教室のほか、県外・海外での個展やワークショップも開催し、こぎん刺しの知名度向上や販路拡大、後継者育成にも大きく貢献している。

